

海拔0m付近で地震の多いのは火道を昇ってくる蒸気が芦ノ湖の方から流れてくる地下水とぶつかる場所で、蒸気が体積を変える場所のためと考えられている。

1959年の群発地震の震源の深さは海拔0mより深いところにピークがあるのに比べ、7年後の1966年の群発地震の震源は海拔0mより浅いところにピークを持ち、浅いところで起きている(図1下の右)。つまり、火道のエネルギーの分布が浅部へ変わったと言える。当時、地下からマグマが上昇してきて箱根火山が噴火するのではないかと心配された。しかしこの時発生したエネルギーの上昇は1年掛かって強羅や底倉の温泉の源泉の温度の30~20°Cの上昇として現れた(図2)。これは箱根火山で起きる地震が温泉と密接な関係にあることを示している。

参考文献
日本火山学会編(1971)箱根火山

とりきち委員 長瀬 和雄